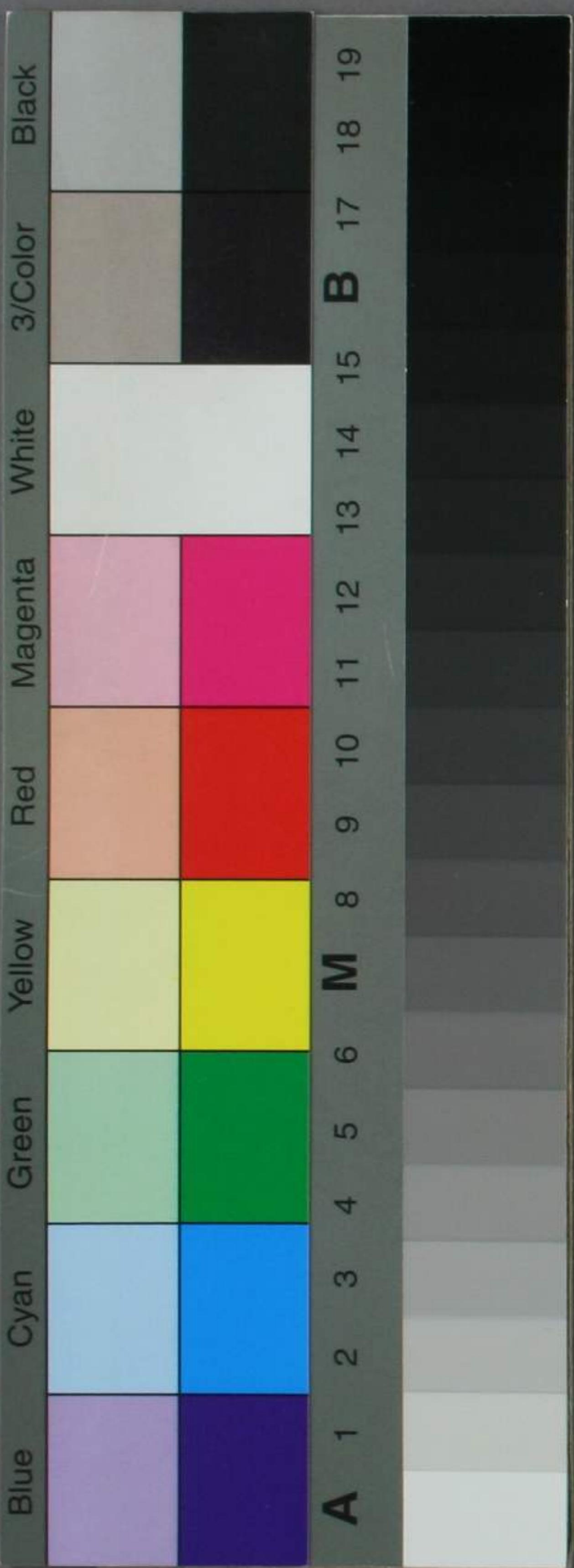


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 JAPAN



御かわの 美色仙女杏 東北四箇八洞

はれのるの宮原十面と拂散をめの船を伊豆丸とす。清朝人長崎偶居のとき  
丸山中のをあての松葉御舟ふ。ひだりたる船のこまうの物方へむ。ふくらふ  
清朝のあゆてあゆの嫁入船と拂散と扇とがおとせたの後後。おのとて  
すがれに倒れるを生度母の今世小教の年と称するものあり。あり  
色のひきと筋筋の私事。よしのと。さとうのと。さとうのと。さとうのと。さとうのと。  
さとうのと。さとうのと。さとうのと。さとうのと。

**功能** 体の用のとを圍むと細毛もたれてたまをもとへ 体の

毛を筋筋のひきの私事のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。  
筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。  
筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。  
筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。筋筋のと。

調合賣弘所

江戸總號ノリカネのとを

**坂本氏**

南總里見八犬傳第五輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第四十五面

名刀を賣弄へく道節怨を獲也  
窮寇を追失へく助友敵と換ふ

却説樹下野浮浪人ハ騒だら氣色もあく松枝十郎真弘うち對く某へ下總  
千葉の福草村の浮浪入大出太郎とひがひの父ひも久世を去りの母ハ明夫で年来  
ひひ親ひう子ひう形寒家へ孝娘茱餌の料足まゝ竭くせんや。純ひ残る  
そひこの下口の大刀かかん祖父ひ某妻既不三世の重宝かくへ身やもか木とちふ  
地に親の為か惜む也要が。美價をねば隼人と。まづ千葉殿。殿。よやを思ひ  
彼君眼豆のとくとく真玉も石もぬ辨染あ。賡物とぞ返され。かくでもかく變  
おふ辭我の御所よ参らる親の為か願事をゆえあげんと欲すふ人を紹介せ

左近人さうじんが綱つなを締しめて縛つかひを整そなへすと再び望のぞを失うしなく又鎌倉かまくらへ赴おもむけた山内さんないの  
官領家くわんりょうけへ售よらがゆとやひよせりうま。されど此これは又見みる所ところ。  
當下某もしちりゆき。世よ千里せんりの馬馬ありとととも。されど此これを知しる伯樂はくらかられば誰だれを吸引ひきうる所ところ。  
或ある不糞ふそくの連城れんじやの壁かべありとととも。されど此これを識しる十和じゅわからば瓦礫がいれきと共とも碌々ろくろく  
より今こそ企望きこうの三諸侯さんしょこうのみか千乘せんじやうの君きみが只ただ下口したぐちの大刀おほのとを以もつて識しらひ。されど  
賢けんと不肖ふせうを擇えらく。举用ごよう傍わきみやく。大約だいがく暗君あんぐんよりこの刀とを售よぬもす。  
扇谷おうやか。官領家くわんりょうけへ賢けんと親おやぢと不能ふのうを愍めんみ。覽らんたと海うみのどうぞ容ゆめあひどと  
あひとなく雛ひなと地じと異ことかで載のり。されど此これは當今無雙むしやうの名將めいしょう。されど  
世人じにんハ誰だれもくつゝある。彼君かれは今上野じょうやの白井しらい不在いな城じやう。巴路ひじゆの程よ度ど遠とおく。されど  
彼处かれへ來く。此この名刀めいとうの價ひを倍ひだりして買くせ。されど踵きびを旋ひらひ。而が跡あとを  
慕まつひ。此この地じより來く。されどもあひも相識あい絶ぜつて。されば入いりよ焉いもや。されば

砥澤とさわ。山獵やまねり志し。市中いちちゆうの風聞ふうもん隠かくれかけ。帰城きじやうの折ときを候まつ。見參みさん。入いらしゆと漫不虎威まんふごいを犯いた。不敬ふけいの罪ざいを宥ゆるれ。これの事こと趣きを以もつて。あらば。あよかかのあよかかの辛あひ。と憚あふ所ところをなく。苔くず。辯古べんこ。流りゆう。水みずのどう。一癖ひき。あき面あきめん魂たま。の後ごの目めを指さす。通雄つうゆう。死入骨しうり。と嘆賞たんじようせぬ。されど此これを中なかの真弘まひろへそのいふと。す果こて舊きゅうの處ところへかゝ。其その則そ締つなの趣きを云いふ。云いふと報ほうす。せば定正じょうぜい。と領りょうきて馬馬おり下げて道傷どうじやう。芝しば上う。牀とよ九くを立たま。されど此これを云いふ。あひ。あひ。正六牀じょうろくとよ九くを懸け。近臣きんしん左右うしゆ。警衛けいゑい。と齊整せいせい。とてへのをう。されば件くだんの間ま。定正六牀じょうろくとよ九くを懸け。近臣きんしん左右うしゆ。警衛けいゑい。と齊整せいせい。とてへのをう。されば件くだんの間ま。浪人なつうじん。あひ。真弘まひろ。俱ともして間ま近く。跪く。起あるを定正じょうぜい要時ようじ。どうんかう。を下總しもつそう。千葉ちばの浮浪人うきなつうじん。大出太郎だいしゆたら。ハ汝汝が。又。欲明失おもてめいしつ。ち母ちふくの爲ため。家宝けいぼうの大刀おほのとを售よ。と欲おもて。うち。孝行こうぎょう。賞たんじよう。うち。大刀おほのと何なんの徳とく。あり。予よみ售よ。人ひとと。自負じほ。うち。三世さんせい

家傳の由来を告よ大刀の銘を何と云ふ。その來歴へつゞきと同れて、臆せば  
小膝を進りさゞ某が祖父故官領家持氏。仕へてゐたれは、兩公達小役人  
ありて嘉吉の結城合戦より陣歿してゆひ。又て父ハ仕官を欲せば下總千葉を退  
ひて年四十にして身ありて、年来浮浪より武器調度を沽却し、ひくを而一  
呂名刀す。されば是世有名な所村雨の大刀か。又祖尊氏將軍より持氏卿妻  
相傳せしを春王殿不讓うせかひ。尔後嘉吉の戰ひ敗れ、春王安王兩公達が言  
させかひ。ひと件の太刀ハ幸ひ不臣が家より秘置り某が父ハ彼公達の伽扈従ひ  
あれば結城の城を抜け、日村雨を腰に佩く辛く屯を脱て千葉を僑居せざる  
より父が自筆の古記録あり。紛れあづらひ。とくば定正も領なく現村雨の  
大刀のゆへ予も豫てあり。傍突うるをも名を竊む質物をりて人を欺き  
利をも揣る鴻許入の世より往々ある習俗あり。汝が父の送書を認ぬる迹の

傳來錄を誰が證据ともうのあらんや別に證とほり。かたと再問れて些も  
擬議せ。御詫び。御詫び。某が父も質物をりて利を謀れる。狡商人のうもあらん。高祿を  
ごも欲せ。小二世浪合の某さんす疑れ。まことに朽ちてこそ之抑この大刀。鋭とい  
陸ひ。犀象を砍るべく水虫蛟龍を截る。唐山の龍泉太阿我朝の小鳥  
時鳩鬼丸龍尾をどぞ。この右よ出べくも加構枝放て。バ刀尖あり水氣  
流れく。太山の石湯ふ異なり。うち振るどぞ。村雨の梢を洗ひ似られ。巴筋く  
村雨と申けられを語。继だ。まほへ。人只不。筋膾炙せ。鄙語。いふ論。す。證据  
この贋物。狀真物。狀よく齒せ。と誇。思ふ答も果ひ。食ひ。大刀を取直し。投放。く。  
見うち。うち振る。ふ。ふ。不思議。う。殺刀尖す。潛然として潰る水氣四方ふ散乱  
く。彼警衛の近臣等が面を撲く。降沃。ば衆皆袖ひ拂ひ。も。交ひ。も。遙  
ひ。の。後を退す。さゞ。定正。林ルをもれ。扇をひく。避。水氣の。内

精好の袴の上ふ被りて結ぶ白露をゑく又嘗感嘆の膝打鼓が破落と落と碎る名刀の奇特よ疑ひ忽地解らえ餘ひ大きがれ。おはくも声高や江等霎時大出太郎がくまく正に證あれば疑心ハ既に冰解せ。との大刀これ。とくとくと大出太郎へ依然と身を起さんとす程ふ松枝真弘推禁ゆくことを不覚て大出生綱中途の見参てとも貴入る咫尺をもあふ。帶刀もく而憚り。あり况白刃を引提く近づくるす。あくんや大刀をこれら小邊与一更といへども聽き。頭をうち掉り原来和殿へ某を脅疑く。やひを放入きものを疑ひ。されも亦人々を疑ひやうふくあくば乱れる世の習俗とく九貴だも賤だも笑の中か刃を隠せ貪慾邪慳へ量りがく。然るを今虚々と高貴人へとく心放しき。身をかねとひ。宝を左右人達よりとく。おひく。あく。もく。あく。身をかねとひ。宝を左右人達よりとく。價も賜ひ。豪奪せられ。されハ孤獨の旅客か。斯夥あく人々と争ひうともその甲斐あく大刀やうとも。大諸侯東やも肩多きよ予を良君とぞ。家宝の大刀を齎して。ちぢみあく推參せんや。かくび予ハもの村兩より。大刀の主と。愛ひ。時冥ふ。ちぢみ。高祿りと召使を免大出太郎を。肩疑んへ要かひ。聊も厭いかだ。ちぢみがくあくへも。許せむ。と鷹揚か。寛仁大度の主余か。眞弘忽弛。開口して逡巡ちのをか。が大出太郎へ依然と刃を引提く身を起し。あらば御免を蒙る。みをか。そぞまきのせうぎ。件の大刀を進ら。ゆく胸前捉て仰さ。あく突倒。推伏て刀尖見り。さく。著れば吐嗟と騒ぐ。松枝十郎龜門三宝平妻有六郎。その餘の近臣外。



様の諸士雜色奴隸列卒をもそひ癖者射々殪えん殃刺や單と散動も  
賈誼う所云角小投する器を忌むとくや癖者を討とも主君も慎ま余を  
を。墮さばの甲斐かと躊躇く握る春の汎も只佛がどくよれ擇にとの時まく  
定正へ刀の鞘よみとわけるも剛敵よ推伏られ終ふ刀を抜くとゆかば兵共極へと  
叫び又せんせんへかづけを當下件の癖者ハ天地よ鄉音けと声を立て嘗領  
定正慥みせけ下總千葉の浮浪人大出太郎と名告へ且く汝主役を計らんとの  
假の名へ去歲の四月十三日江郡田池袋の戦ひ一簇後類貞を盡して汝が為  
せびりへ煉馬平左衛門尉倍盛朝臣の老黨よひのあーと知られる犬山  
監物貞知入道道策が獨児よ乳名道松と呼ばれ天山道節忠與とひきり  
君父の讐言を復さんとく薪よ臥し膽を嘗千辛萬苦の宿望せ今こそ果れ怨の  
心。刃受よやと罵れば定正のふく驚怒く反復さんとちう處を起一も立て誓を左も右  
も

楚と引著て細頸丁と搔切う松枝龜門妻有の黨敵の後類皆こゝとをみて  
吐差と騒ぐ大叫喚もすを遠慮のみを下さじ送恨よ堪ひが今きくか備を文書  
達もあだられ撃勇と刀尖を排列ひ内へて八方より競ひ蒐集道節ハ左軍引  
提一讐敵の首級を授捨くしこと嘘々縦横無礙ふ殺靡けろ必死の大刀風雨砍  
平砍名刀の奇特よ土を潤しろ道のみすす不敵の難兵ころを獲こうと撲地と砍  
あれんて。修煉の身はも瞬間よ血ハ豚鹿の野よ満く轟りきりぞ豆くらぶされば一人當手の  
向か前あた勇士の勧記壁言が餓虎とて群羊を駆みく唯是一個の道節よ  
夥の士卒辟易しくおへ足場の悪がを且退けと言りつ瀕と乱とく逃迷の難恭  
誘引れうち松枝龜門妻有の諸士心をうへ早れども大廈の倒れとほんとく木屋  
ぐこれを柱ん皆共倡不速足を踏乱て逃走を蓬一返せと呼被う道節を  
あきらめ。刀尖すら雷る水氣をうち振打う一町あまく追ふ程よ下叢繁た教ひ蔭すう。

矣。あつらひやう。ひうるわや。いうそもあうとみ。あらう多々  
用を喰と作と頭れむ。一個の若武者。え怎麼あ打扮と但見れ。素絹小皂絲  
。ゆうれあう。そうく。のうく。うせんとく。りそぎをうすまえ。せふそりくら。  
りと壺麩の花を處々と篠簜をうる。狩装束は。葱風の身甲とて。精好の奴袴。  
きふうこ。こて。まわ。もえま。  
亀甲。金うち。肱甲。臑鎧。を透間もあく。具足は。腰央二尺五六寸。金作の大刀。  
かづう。あくまう。くまんごふ。  
海豹の尻鞞。被。く。九寸五分。短刀。横佩。左より。重藤の弓。握太刀を挾  
。そいのそ。そや。き。もひ。とう。  
そ。鷺羽の征箭。兩條。を把。えうそ。その隊の兵三十餘人。もひく。短鎧の刃頭を  
すく道節。が前後左右を。齊々と捕続。復。武者音。を。揚。えうそ。當下  
く。道節。が前後左右を。齊々と捕続。復。武者音。を。揚。えうそ。當下  
件の。善。武者。ハ。弓杖突。く。声高。や。不愚。か。大山道節。良将。へ。ち。ぐり。時運不  
ふ。あはよ。さんねい。さなが。く。こく。  
稱。神助。あ。官領。ひ。ぞう。汝。お。犯。孤客。お。敷。れ。あん。や。そ。謬。く。汝。う。豪  
く。道節。が前後左右を。齊々と捕續。復。武者音。を。揚。えうそ。當下  
く。道節。が前後左右を。齊々と捕續。復。武者音。を。揚。えうそ。當下  
命を隕せ。假。僧領。ハ。只。是。當家。の。勇。臣。か。越。杉。駄。一。郎。遠安。と。ゆれ  
。き。を。ひ。く。も。そ。ま。あ。か。あ。え。ま。あ。り。あ。よ。く。じ。く。ま。り。  
め。去年。池袋の捷軍。お。汝。が。主君。倍盛。の。頭捕。く。名譽。の。感状。を。賜。う  
ご。の。の。  
剛。若。か。う。れ。ど。お。汝。が。年。の。よ。う。だ。を。え。く。漫。ふ。そ。く。侮。り。く。阿容。タ。タ。と。く。

さ。ま。く。不。思。議。の。僥。倖。か。ん。が。く。ふ。れ。を。誰。と。う。る。官。領。補。佐。の一。老。職。武。術  
ざ。ぐ。ぐ。き。え。ま。あ。ち  
文学。敷。嶋。の。道。み。も。暗。く。で。そ。の。名。ハ。都。鄙。よ。高。く。う。る。巨。田。左。衛。門。大。夫。持。資  
ま。く。う。だ。ず。た。ん。ま。う。を。え。き。く。ら。う。ま。う。の。ち。き。け。く。う。ま。う。の。ち。  
入。道。寛。の。長。男。か。新。六。郎。助。友。が。父。の。奇。計。を。受。け。か。く。汝。を。謀。り。と。あ。る  
が。か。お。な。ぎ。父。道。寛。豫。く。あ。う。豊。嶋。煉。馬。の。残。黨。の。隙。を。窺。く。う。ま。う。ん。と  
さ。ま。く。遠。謀。あ。く。を。も。と。去。歳。の。秋。あ。う。彼。此。ヘ。士。卒。を。よ。し。遣。て。竊。ふ。掲。り。向。せ。よ  
き。ゆ。か。く。ま。う。う。を。ま。く。う。を。さ。だ。う  
下。野。武。藏。の。間。を。優。婆。塞。の。姿。を。変。て。左。道。を。す。く。愚。民。を。迷。一。錢。を。集。そ  
お。ん。が。ん。と。て。ぞ。み。く。あ。か。け。せ。だ。す。と。あ。は。く  
軍。陣。の。便。点。を。充。る。汝。が。影。迹。既。く。く。頭。れ。う。ま。ぎ。れ。幻。術。く。と。火。バ。刃。捕。易。く。  
ゆ。断。の。体。よ。り。な。れ。て。あ。ら。誑。引。を。せ。そ。そ。首。領。ハ。近。日。あ。う。白。井。よ。在。城。を。あ。る。  
う。く。駒。一。郎。よ。大。將。の。狩。裝。束。を。賜。り。う。き。の。五。日。の。早。旦。あ。う。砥。澤。の。山。の。狩。倉。ハ。彼。建  
き。う。の。む。を。僨。が。汝。を。釣。ん。為。う。う。父。の。先。見。果。て。違。ひ。を。今。招。す。の。網。よ。入。る。汝。が。命

運を如彈う。討捕するひと易くれども敵かぐ。可憐。死勇士と多がま  
箭よ被せ及び死身の力を量りく非を悔ひ時の勢を知らず降参せまと  
ゆき。道節ハ謀すふりうと即ち敵ふ計り。至く怒りて面す朱と赤とを疾視  
詰る必死の覚期。又大刀と直と些も撓あむ。叔ハ助友ごとあれ耳猿。之に死降  
参呼り九世を易るとも讐の奴とまれやハからん。今定正を討得せどもも先君不  
鎗を鍋とす。越利もあらド主の仇也。ひの隨す數々あれバ聊て君尊靈を慰尙  
處が有。恨らう。父の讐。龕門三宝平五行を擊ひ。まことにほぬかられ。然と名  
もあら。雜兵を幾百人殺す。汝とまれと勝負を決。先助友進やと刃を抗て  
頻りよ招く不敵の廣言憎も悪と捕ぬの兵ヤツと被ふ諸声と共に齊一陣  
肉身鎗を前後小走。越反踰右より受く。左より流を。煅煉の刀尖丁々發石と  
疾風よ枝を折。ざく鎗の蛭巻。發條。抜砍落されく。逃まわ。或ハ真額乾竹割。

或ハ洞創。脣車矢庭。余を墮す。のを十本。あすく。送も痛も負ぬ。  
か。忽地發と開た靡け。道節得す。とおもく進みて面もあらず。助友は走迹  
つんと。程よ助友駆。がぞ弓よ箭刺。かく能弯。圓て。彌と。彌と射る矢声と共  
道節ハ身を淪して。避く。程もあらず。射出を。二の箭を。天刀を。子と切  
拂ふ。神出鬼沒の疾勵。な。助友ハ心聯く。弓を。裏哩と投捨。大刀を。授んと。序  
程よ松枝妻有の近臣。ホ時分を揣。まく返。まう助友。子力を。聚へて。被懸。且  
よ。下知されば。その隊の兵。数十人。推闊。そく。因て。微塵。よかれど。揉。うる。  
當下道節。多。やう。こ思慮の足。ひく。敵の謀よ當られ。とび。先君の讐  
敵真の定正。小。ゆき。め。あら。ぞ加旗。父の讐。龕門三宝平五行。もこの豫よあら  
を。解。死ふ。漫よ進く。戦歿せ。世の胡慮。ふ。あらん。の。大宿望を。遂。を。の。限。と  
翌。あらん。や。幸。ゆ。と。黄昏。う。只一方を。殺。用。なく。身を。全す。と。時を。俟。あらく

死もるとき尋思の脇を固まる奮戦実戦初より精神もくかりて更勢  
中へ割々入る迅じ怡懶の如くも一條の血路を開拓く且戦ひ且走ひ且攻頻不  
焦燥いそきちと士卒を置り撃下ひげこと真弘之通共侶よ何處までもと追ひテテ浩處よ  
信乃莊助現八小文吾ホの四大士ハ最裏もとご明龜の山中やま庄助が遠眼鏡を  
ひそりとひ武士をひとあらわゆる所於ん尙あふとのあらんうそ山を下りて  
彼此と尋索さぐくその曉昏あけくまよ白井の城へ遠りぬ。一村落を過る程ふ里の老  
弱駕騒よしをく今如此いまこの松原まつばらゆく官領數かずれぬ人より寇寇二個の浪金を  
煉馬れんめいの残黨ざんとうかうめどと火ひべつあく。管領のつそを擊うれぬ死死彼癖者ひきの殺  
されへ去歲の軍ぐんよ名を揚あが。御内の越こし木きとり入いぞとよそふをあれかくゆ  
あきと癖者ひきの術じゆ煅煉たんれんへ單身せんじんかく瞬間まばたきよ死人しで山を築つきとひふ逃とてとく  
村むらよ走はりひへり。ひへりと櫛くしぐへる門戸もんとをとく鎖くさりせ女子めのこの喧華けんかの側杖打そばう  
き。よしと呼よ涼音声すずめのこゑ書かく皆東西とうざいへ奔走はんしゆ。騷劇せうげき大おほきよぎれば四大士よもうち  
驚おどり。よそよそのこのこ驚おどり。原来此こゝよりゆく復讐ふしゆの本意ほんいつを達いた。彼大山おおやまをあらんうそんそく  
その處ところへ赴ひきひのぞう虚きま実じまを考かす。ひんや暮くろぬ間まと共促步きみそくの運うんびをひそ  
ぐ。里遠離さとうりる晚ばん闇やみ前面まへを透とお。長視ながみれば年尚まだ死し。一個ひとりの武士しもふ白刃しらのを  
うち振ふく。追來おる敵のしを物ものせだ。歎あせだ。返かして殺さ靡ひけ撃う退しりぞけ。肩  
戦たたかひと兩三度道ぢのやくの四大士よの間ま忽地こくじ衝ぶつと入り。背せきよ立たとええれ。往方むかへ  
あらんうそり。ものと先まへ巨田助おほたすけ支しホホ士卒しそくを頻ひんよ駆立とて遙とお間まもく追お蒐め。前まへ票ひき  
立た在まむ四大士よ。是これ道節どうせつを助すけ大刀おほのこの同類どうるいかうと多おおひん被ひ鬪たたか。苗なキな下さ知しれ。小こさ  
多おお勢ぜいを頼たのむ捕つかみの雜兵ざつへい咄とつと嘯うそと衝ぶつ出だを鎗やりの刃のこ頭かしらへタ立た而めの電光でんこうゆも異  
か。四犬士よももりふと驚おど避さけても一言ひとことの問答もんとうよ暇ひまをあれ。己おのとをひき腰刀こしを  
抜ぬき。四犬士よももりふと驚おど避さけても一言ひとことの問答もんとうよ暇ひまをあれ。己おのとをひき腰刀こしを  
抜ぬき。四犬士よももりふと驚おど避さけても一言ひとことの問答もんとうよ暇ひまをあれ。己おのとをひき腰刀こしを

敵より四大士あり。譬へ山の幸雄。ホグ一虎を追走りて百獅子。逆かく忽擣  
殺崩され。一町あたり退却を。助友を守返して逃る士卒を罵激して。みづち  
短鎗を閃らし。四大士ふうち逆へば松枝真弘妻有之道恥を知り名を惜む武士  
を。あてもあくざれば。助友を相援け。刀尖より火出る。おでふ塗噴て攻うる。  
浩處。城中より援の兵百騎。許汗馬よ。鞭ち宙を走して。もとより近づく程。あれ  
身方を勇々。岡の声よ。逃る。士卒も声を合して。皆共倡よ競を。蒐まば新隊へ  
備を。後。横鎗を。金うち。この時既より日暮。影脇細。六日の月も  
立雲よ。隠さる。又頭よ明闇不定の轍を。葦盾よ四大士へ一進一退。力を勧  
じ。苦戦よ大刀の鋼鉄續々。筋びどく。もとより浅瘻。一所負ふ。力かく。千変  
を。を。萬化の秘術を盡して。頻よ捷よ衆。よのう。不知案内の夜戦。あう。緯。ハ素。あり  
不意よ走りそえ。援の兵。あれが。おひども蒐闊られ。送ふ。搔す。を。ゆせ。信乃  
莊助。城兵の新隊の中よ。圍れ。又現。八小文吾。助友。が隊兵と戦ひ。かく暇死。四士  
四所よ別れて。危窮。あ。孤。九死一生。阨難。あふ。て。じよ及べ。存亡。よ。知。え。る。だ。  
寡を。そ。衆よ敵。ひ。わ。己と。せ。ゆ。の。三縁。四大士。萬夫の勇。あり。敵。よ。一介。比  
術。かくとも。脱れ果べ。ひよ。え。ぎ。う。を。有。斯。一程。よ。道節。ハ。辛く。大敵。を。殺。脱。く。  
走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。走。ひ。れ。  
尻を。うち。掛。く。且く。息を。吻。く。折。く。忽地。後方。不聞。の。声。して。轡。大刀。音。え。ゆ。え。る。  
道節。耳を。傾。げ。て。原。來。肩。よ。來。つ。る。跡。よ。烈。」。砲。戰。ひ。あ。ふ。を。嚮。よ。れ。頻。よ。慕。ふ  
敵。兵。を。砍。拂。ひ。く。走。り。時。前。面。よ。來。つ。旅。客。ホ.が。間。よ。入。り。立。紛。れ。丈。轍。く。敵。繁  
遠。離。丈。丈。折。も。黄。昏。か。る。敵。ハ。四。箇。の。旅。客。を。よ。う。助。大。刀。の。丈。ど。と。名。く。捕  
龍。く。轡。あ。ん。り。あ。う。び。ハ。コ。テ。來。一。跡。よ。う。く。戰。あ。べ。死。彼。旅。客。ホ.が。多。い。ます。  
故。ふ。それ。轍。く。追。き。を。脱。れ。脱。れ。故。旅。客。ホ.が。敵。よ。轡。よ。う。バ。便。是。人。を。殺。て。

まゝ身を保つゝも勇士のせうる所か。耻亦これより甚へばや。ひそゝ彼處へ走り  
還り。旅客へを極ひん極ひぬをもとあ人々と共佑ふ死が生るふ勝ち。口あひ取  
と肚裏に。ひそゝ遠く緩く帝を引綿び。裳を褰げて葛直は舊聞  
とあひ。處へ還り。それば果と四箇の旅客へ城兵よ捕圍れて既よ戰ひ疲労さん。どの  
事。危船とひべく。賸城中より加勢の武士百騎許を。來れりと。海へく。勢し始  
ひ。益増られ。道節。要時。尋思を。とす。とす。敵の捨うち。箭處々。多きあり。又  
紲うち。列卒縄も。有り。是究竟と。志す。かうらを。据り。箭を。撮り。索え。漏き。左  
側。あつ。大竹敷小潛入りて。敵の後よ近づく。を。手の絶えかうき。かく。又  
道節。幾尋う。事件の索を。彼些の竹よが。あく。引動。と。忽地。不聞の声を揚  
ぐ。城兵。これ。驚き。かく。もつて。見え。る。處を。竹敷の中。うへて。射出せ。強音空  
箭。あく。矢庭。お命を。陥。り。五セふ。及び。それば。城兵。悚。金。騒。だ。辛く。原来。敵よ  
走り。程よ追捨。く。も。跡を。瞄。う。荒芳山の方へ。走り。城兵。よ。ひひ。けず。  
敗走り。息つ。を。あへ。白井の城へ逃籠。う。と。頗。す。内擇。あ。う。と。助友。怒て  
声高。や。ふ。蓬。た。兵。共の逃足。を。計。ふ。敵。ハ。煉。馬の残黨。す。や。伏兵。あ。を。がく。  
怕。す。不。足。る。の。ふ。敷。中。へ。箭。を。射。被。け。鎗。を。突。入。れ。て。駆。出。せ。よ。逃。る。奴。を。が。  
と。追。蒐。よ。只。一。人。の。轍。曲。を。後。日。の。咎。を。脱。れ。と。つ。う。ひ。が。と。敦。園。之。  
烈。く。下。知。を。傍。れ。ば。城。兵。これ。よ。焚。れ。く。敵。の。邊。へ。ぞ。一。驚。且。箭。を。射。被。け。鎗。を。  
い。れ。果。ハ。端。す。接。分。く。衆。皆。捜。索。る。よ。敵。ハ。む。と。も。在。ら。と。躬。方。の。送。せ。ー。列。卒。

連を彼此の竹よ結びく指を原来熟く謀られうる遠くに邁ト追蒐よと再び罵  
騒ぐ聲を及時移りく往方を知りび呆れて進む擬勢も即日友の後度の不  
覚よ安らひにども窮寇へ追ふべし。圓白井へ退却く便急をりく送りく  
捕獲をあられどもひそて強きも追せば竊よ家隸西三人謀を授け勇氣を  
真弘之道共侶よ全隊の士卒をのそぐて白井の城を還りる。かく宵へか月  
甲夜かく寂寥く人跡絶く列棘の松の背へ蒼田よ風渡る土堤の茅萱を  
置く露を身と取る虫の声高くも澄る夕月夜影え薄だ单衣の裾を脛  
表で端折く腰不帶う両刀の外か一刀押添うる。とも怪れた一個の武士稻塚の蔭  
ありて四下をえんぐり見えりく忽然とく立出る是はこれ別人かく犬山道節  
ふひも。すくちかきは。あまく死。あざ。もとより。かど。まく。  
志奥かく既く竹敷の奇計をもと夥の敵を退けく輒く四箇の旅客を拯ひみ危へ  
ゆく。駆れくをもと件の敷處在らを近たまう身を潜る豫之時分を揣りそ。

吉ともめりて。い。あね。考え。助友ホグ全隊をゆく白井の城へ還りやくを遣過一日送りて再び顕れやる  
かく當下犬山道節ハ彼此がりとく横り臥せ。敵の死骸を西々かく  
スル。曩裏ふも投捨ち越杉駿一郎速安が首級をゆきうす揚く月を燭ふ又  
かく。怨の外臂凄く。霎時睨くも頷だ矢運ひ。金うるを官領定正  
どもやひ。轡への臣遠安かれども這奴も先君倍盛朝臣よ鎗を鶴くも怨敵  
かく。彼深界の恥を雪ら睡耻の怨を復せハ皆是志士の本意かく打落くも  
仇の首級を捨て走り大敵よ怕れなりと入ひん些少かれども今宵の家裏  
も。先君を祭の胙。されよ優モのみ更トカ。と知テ。ごちく死骸の袖をゆき  
さらり。さく。。そんもき。ちつ。のう。散落離と裂く件の首級を推包む心のとけくとお端を帶ふ融じて結附を  
後方よ立てく。すのあ。とおも。とて道節ハ叫ぶ。蟲蚊を拂ひ。なち去らんと。す  
程小癖者等と呼苗く。晃りと衝出。鎗の刃頭よあらぬうと道節ハ序足代子

あらもと身を跳とく信とえたり此度の敵一人狹百騎より城兵ごもみを逃  
足へ速き。小汝一人が一矢を虎鬚を捺るハ殊勝なり名告れ少んとひせも果ば  
鎗を繁枝く声をやう立道節さるを廣言せられへ初度の戦ひは早毛を肘ふ  
痕を負されば又功名を貪りて故を捕まつ駆駆ハ朋輩よ譲るべ被處ば  
樹蔭よ退ひく以ひを時を移す。かくて空しく城中へ還らんとの本意あらず。  
むすり放す往方を索ねく目今迹を認めず。名ハ音も笑ひん去歳の四月の  
戦ひ小汝が父道策と組で當坐の首を獲らる。龜門三宝平五行の親子三人  
もぐもかがるハ過世あり。武士の名聞。首をもとめと罵りう道節へ願ふ敵を  
疾視詰く声高す。不原来汝が五行あかとの名へ豫く笑へを面を楚と認ゆ。六  
轡ひ偏せて小居残りく物く名告るハ天の賜。武運工そ懲り。要時も忘  
りぬ父の仇其處か退ひきと敦園く刀を見よと援放せば三宝平も亦わがえある。

武藝よ誇る。些も撓まず送不烈しく声を合へ衝出と鎗撃大刀の音も  
際かに生死の際一上一下と柄を盡し。要時ハ挑戦へど忠孝無二の道節が  
獅子奮迅の怒り。頻りよ進む陽の大刀を終ふも陰よ闊う。従ふ鎗を豪  
りと巻落され。大刀を抜んとちる處を大喝。一声道節がうち内を刃に  
あ。下ふ三宝平の身を轉へ。足空す。倒れる軀のうへを越え。首を  
遙あやむる松小當りて落して。程小道節ハ父の讐え。人の隨ふ轡  
果。くろれが放び比々。物も。刀を歛へ。樹下から仇人の首を引提焉。  
又その死骸の袖を断離く。包みて腰を著す。浩處不助友が曩裏よこりへ  
苗置る。西の家隸ハ。ちり。鳥銃携へ東西の樹下す。寃あく矢比を擱り。西  
火蓋を鎗らと。程小道節目を。遠く。左右よ。掏む。小石の飛砂。西  
す。ひどう。顎を打破られ。叫びもあらず。仰あえ倒れ。又東方一人。鳥銃を



うちを。おろひあへてと。打落えり驚嚇く取らんと手を取らもやだ道節へ鷲鳥の如く疾近つて。  
足を飛して礫と踢る爪頭尖く吹をあてふ撲折れり。炎所あれば声もぬ立たず。  
足を張く仰反う程もあくせば。又一人弓の箭刺す。樹間すりむを道節達  
そく迷方鳥銃取るやうに火蓋を鑽て。撃と放せば響と共に樹下ある彼  
一人も倒しき。三人が外お今からも敵あらずと道節へ鳥銃を投棄す。袖を  
拂ひて悠々と高峯のかへ還りて宿を何處とおぐあらねども先後主も主を  
思ひ親を忘れぬ。犬山へ尾張のまゝ上野の白井の城の城持士卒もその里へも後  
世より語継がせし。猶へと道節ありとひよどれ。頻泣兒も立地す。声を輕て怕れど。  
ええと先きう事。ふるやせども。れぞく。わざま。おふくろ。かづひ。あ  
三國の時張遼が武名。小兒を權した。遂來さすも自覺した。名を海内ふ揚よけ。

第四十六回 地藏堂と莊助。首級を争ふ  
山脚村の音音。舊夫を拒む

再説信乃莊助現八小文吾の四犬去。又金も白井も城兵も捕圍れて苦戦。時の  
移。死を究め。誰う圖らん竹叢の中より闕を作。箭を射出でて  
見れを助める。あれが城兵これよ辟易して鐵壁す。堅かげる重圍。忽地釋る  
あく。夜は紛糾を理でて同意異途ふ走り。死をゆく。一生をぞ獲  
うけ。そが中か大川莊助義仕ひぬる日庚申塚。法場。三天。死を極れ。恩  
義をあふ答へ。とひふれば進むと死も三壬。先もく防戦ひ退くと死へ廢しく殊  
き。後れ。終は信乃おが性方をあく。六日の月へ出かう。秋天の定かくて結陰  
ても又齋も影ひと細た。嫋竹のあぶ。便死。宵かれ。もひ合へる。のあけれ。  
何處を投く。彼人を。追著んあらが。あらぬを。措平が信乃。書状の字をあひ。是。  
處。あらまき。そこ。ここ。あらまき。そこ。ここ。あらまき。そこ。ここ。  
今ハ。二三十町。あらまき。と。物。肩。この山。北麓。あらまき。そこ。山。北麓。あらまき。

大歎と戰疲勞。うへよ不知案内の夜行を。むとを頗て不走りふければ。どひう  
うえ。のと。うえ。餓かく堪がる。き食此邊へ邁どもやげども。走らる郊原ゆく。  
憇んとやな家も。おとされば右側を。茂林の中よ火光隱々と見えし。あやも  
栖べ住む。ありひき。従一碗の飯を獲ひとも。敵かく水を乞ひと進み入る。  
一町許件の茂林。あらそはす。ふ人の家。ああだ。最老の樹下の補小僧  
地藏堂。あ。彼處でアヒロ火の光。との佛へあらせ。燈明の魂。あ。堂を  
一間四方よ過ぎ。これ狗ひく。朽傾たく。骨を頭を壹。擔ふ田文地藏堂と題。  
うち扁額を掲さう。このとれ。莊助。かま。荒。小堂。あれども土地。由緒あ  
れ。あれ。靈佛。か。ハ里遠離る。茂林の佛。誰。夜。燈燭。を進ら。死。田文。と。耕作。  
を。利益。あ。の。缺。近郷の帰依佛。かん。ど。り。が行婦の名を。ゆ。母の塚え  
り。利。を。悵然。と。立。始。から。肩被。を。え。く。ふ。地藏堂の左の。ふ。苦埋。

石塔六七。あらそ。間。近属建。と。お。海。木塔婆。あ。言訪。の。樹。間。房。  
草葉。虫の。声。の。之間。でも。間。樹。の。間。振離。贍。れ。ば。む。立雲。又。入月。の。影  
を。出。け。遠寺の。鐘。声。を。漏。さ。と。懐。ひ。夜。ひ。深。け。ぞ。初。漫。か。り。そ。も。が  
ても。後。れ。あ。を。急。ぐ。と。甲斐。や。あ。ん。且。く。あ。不。憇。ん。と。地。藏。堂。の。扉。を開。か。て。  
霎時。念。て。裏面の。を。つ。く。と。入。ま。石佛。か。坐像。身長。三尺。許。ある。  
前机。か。一雙の。花瓶。ふ。草。の。花。を。建。う。日。あ。經。よ。ケン。萎。そ。う。を。机。の。中央。  
両。の。盛。物。あ。頭。を。推。鶴。て。あ。ま。く。と。皿。か。ハ。案。と。桃。か。時。取。て。ハ。毫。も。亦。百  
味。の。飲。食。か。う。を。と。そ。が。渴。む。声。を。被。く。地。藏。尊。々。六。道。能。化。の。教。主。と。て。餓。鬼。を  
濟。せ。あ。ひ。か。が。ま。が。餓。ち。を。憐。み。と。御。前。の。供。物。の。好。い。よ。禁。菓。を。肥。え。ん。よ。り。己  
別。當。ほん。許。さ。を。と。戯。か。く。進。み。入。り。引。か。ー。と。柰。も。桃。も。漏。を。正。か。く。忽。地。よ。蓋。せ  
ふ。桃。ハ。四。す。潰。く。甘。液。の。ま。う。れ。が。飢。を。忘。そ。の。と。か。だ。渴。の。や。く。止。ま。り。方。便。無。

量の佛恩をと又戯として額をつて退ひきとほとな。孤燈の油も竭て忽地す  
滅する。もの燈明はあれかくまれ空へきて取うち曇るぬ雨が降るとも復月の出  
ぐもあら夜の荒茅山まで邁びて彼人より遣しとい今まにい決がこ。今宵を  
みよ時を伏處をさくべ伏と尋思不覺ひ安うで舌打されば眞口真  
仙狹諸事は鳴立れりとく尾もむらぬ小堂の柱を倚りと猶ゆく坐を  
忽地人の足音にて前面すら見るあり。莊助を多く遠く初夜過る  
この茂林へ松も燈も獨ある。豈參詣のめす。必盜賊の臥草造るわん  
まん躲れ。楚と見定わゆとそばやまく身を起して竊歩て左邊を石塔の  
背よ身を潜してその近つを窺ひ。程よ大山道節忠知の君父の讐言を繫  
果たる兩級の首を腰よ著くとも其處を立退る。案内知るところ無く。  
捷徑を疾走り。とく夜初更の比及す田文の地蔵の茂林裏をまわり。この堂の

邊あり。舊塚の間也。今茲四月十五日君父の一周忌の追薦小由縁のむす達  
うし。塔婆一基あむられば件の首級を嚮礼んと茂林の中を進入る浩然  
後方す年老る賤夫の持の脚絆よ襷端折して竹子笠を戴たる肩から二枚の  
小包を結合して掛く道筋が跡を跟てまつ地蔵堂のあそき。樹の下陰す  
立躲避れ。近くもよび成そあり。道筋は前後よ窺ゆるやうと金を。塔  
婆の下小進向り腰よ著く兩包の首級の締塊解ちて塔婆の前よ聘贈。之  
恭く額を頗る頻よ祈念を凝らす。莊助の塚の蔭す。透つてども意を  
ゆ。肚裏よあひやう。この辯者が廻して舊塚を祭る。引剥せ。穢物を邪鬼ふ  
供類して。身造化を頼む。這奴憎む。憎む。先うち驚て試て。之を  
と石塔の間より出で。伸て並備へて二枚の首級を手と搔撫て引入る。之を  
考程よ道筋をく頭を擡く驚た。庄助が腕をすと攬詰く引出さんと

前へ曳く莊助へ亦引著られ。とぞが尽些も身を動かし。応ひ千尋の大木は巨根を四方を張り方。がどく千曳の綱。ひよ被ふとも肩あぐもあく。され道節へ。ひよ礪記。あもく怒き引あふ程。ひよ送ふ物。うぬ金剛力士の世尊の鉢を。華やく紫雲を踏む。あ。ど。あひひきう。せなう。全らり。う。かふ。ももまち。こゝそ。外せ如く。間よ兩箇の石塔を瓦落離撃と推倒。て忽地龍首のあく。あり。され。道筋獲。う。と衝と寄せ。く股杖。ひよ腰を。踏入。左ひよを帶の締塊へ被ふ。もろを。莊助。臂を拈て振釋く。雙方入躬の最。ひ。抽手相撲の極秘。眷法の妙奥。豆子。知。あ。う。され。が地を踏。凹。ま。力足。烏夜。ひ。目標。ハ暴雄の勝負。孰と。死争ひ。果。一奈末與美の腕。ひよ甲ひ。かう。けり。この時。また。彼老人へ樹蔭。ひ。息を凝らし。透。一長視。舌を吐。たその勇力。不。呆。可。端。かく。が。難。う。一を。聊。覺。ある。ひ。の。う。見。ゆる。面色。一。走。り。寄。つ。兩人。が。間。へ。杖。を。衝。入。る。推。分。ん。と。老。翁。道筋。も。莊助。も。再び。それ。驚。だく。思。ひ。を。組。る。を。放。を。卻。舍。ふ。落。せ。首級。の。包。を。

兩人取り合ひ立よる處を取ら。一も。や。が。又老人。間よ直と躬を入れて杖採。而推隔。も。早速の。衝。だ。を。ども己が肩。あ。兩。袱の。裹。物。を。う。わ。落。ひ。遠。く。躬を屈。一。頗。下。を。搔。拂。る。程。ひ。う。せ。で。兩。雄。ハ。齊。一。焦。燥。立。如。法。夜。ひ。認。ぬ。敵。ひ當坐。の。み。覺。當。る。任。て。左。右。う。彼。老。人。を。突。退。れ。ば。踉。蹕。が。う。轉。も。倒。れ。せ。兩。三。步。退。れ。く。小。膝。を。突。る。下。ふ。拂。モ。當。一。ハ。道。筋。が。讐。言。の。首。級。の。元。包。ぞ。と。ひ。ひ。ね。食。く。も。ひ。と。あ。う。ぬ。ひ。と。あ。く。引。よ。く。左。右。よ。抱。掣。身。を。起。せ。と。ひ。ス。あ。う。ひ。道。筋。へ。探。り。當。る。老。人。の。兩。箇。の。包。を。と。讐。言。の。首。級。と。ち。い。べ。要。時。も。措。せ。諸。ひ。よ。引。提。と。直。躬。と。立。一。を。それ。と。ぞ。う。莊。助。へ。且。く。鳥。夜。ひ。透。一。ア。程。を。揣。り。く。腰。ひ。を。晃。り。と。撃。す。き。の。ね。ふ。れ。丁。と。砍。る。窓。の。前。の。邊。よ。推。倒。さ。る。石。塔。の。掉。石。の。稜。破。と。擊。う。刀。尖。銳。ひ。卷。化。す。の。石。四。五。寸。打。削。ら。れ。て。燈。と。出。る。石。火。の。光。よ。面。を。認。程。も。や。姿。を。隠。せ。道。筋。ひ。火。を。獲。え。脱。ひ。火。道。の。柄。ふ。往。方。も。あ。だ。あ。く。る。を。老。人。へ。肩。跡。を。慕。ゆ。く。舊。本。路。

石塔を砍て  
莊助

道節と走る

犬川莊助

姓名未詳



走ふ。庄助は亦との足音を下の癖者かや。と見かけば些も猶豫せ。續く  
茂林を走る。何處をと投げて荒芽山路へ進む。と暮り隨小霧ぬ宵六月  
月没す。と暗氣がその迹を認む。只心ぞ心あらむ。板山の麓村を著す  
ける不題。上野國甘樂郡荒芽山の麓村。小音音といひ。微賤の老女。わうけ。年。六十  
五。五十あまり。二三。やも。かくぬべ。原。武藏。の。此。を。故。あり。く。去。歳。の。夏。この。山。里。小。世。を  
避。一。す。れ。て。き。え。を。あ。き。き。あ。き。と。き。こ。の。う。ま。う。と。く。み。る。つ。ひ  
ある。郷。の。空。か。く。て。北。三。芳。野。の。田。面。の。雁。へ。あ。ざ。本。緑。と。秋。と。一。かれ。が。急。と。冬。を。櫻。花。洗  
衣。綴。刺。と。ぞ。鳴。虫。不。敵。驚。さ。し。今。宵。と。夜。延。の。績。苧。暇。か。れ。現。世。と。う。に。苦。手。を。  
今。多。ひ。あ。る。浮。世。の。中。よ。老。の。杖。と。頼。と。一。両。箇。の。子。共。ハ。い。ぬ。比。主。の。供。と。戰。場。小  
走。死。せ。り。と。も。生。ま。と。の。よ。信。文。と。家。よ。還。す。と。両。箇。の。媳。婦。の。兄。が。妻。を  
夫。と。名。づ。け。又。弟。婦。を。單。節。と。遊。べ。年。ハ。二。千。と。十。八。公。の。松。の。操。よ。常。葉。の。竹。の。子。を。

産せまく。兄妹。伏あぐ。小玉匣。ことを近く遠離。どもよ。お隔。死相鳴の優  
きを。勞ひを。姑よ。朝夕。竭。孝行の徳。孤や。鄰へ。とく遠た。山脚の孤屋。されば  
あも。親族も。ゆく友も。近く住得。隨の別世界。言訪み。のへ。重律。檐端。暢ふ  
声を。と。う。を。あ。せ。い。か。い。松風。と。絶ぬ。覓の音。ハ。あれど。女子世帯の水入らぬ。三人ふ。それば。姦と訓ふ。文字を我  
入。や。で。背門の秋蝉。鳴暮。しる。七月六日。の甲夜。過く。還らぬ人。を俟。まび。ま門の  
戸へ。ま。鎮。さう。有斯。音。音。へ。績果。芋桶。を。搬。遣り。後え。て。哺。單節  
き。ふ。より。て。管領家の戸澤山の狩倉。斯邊。盡處。夫役。を。指。當日を  
辛く。免れ。も。愁。よ。售。も。ゆ。遣らぬ。彼瘦馬。の。ある故。よ。け。よ。毛。へ。村長。と。く。許。さ。ざ。  
一。か。兩。じ。あ。家。小。男子。の。絶。く。あ。れ。ば。可。愛。や。曳。手。が。今。朝。未。明。す。り。馬。を。追。ひ  
つ。夫。立。く。如。隨。帰。ま。も。來。ば。途。ゆ。く。荷。脱。の。馬。よ。逢。く。繼。て。ち。や。く。坂  
ら。と。ゆ。や。一。の。ぞ。り。ゆ。ざ。や。白。井。志。へ。ゆ。の。徵。され。ト。趣。舍。ま。ろ。く。丁。場。あ。ぐ。替  
え。と。ゆ。や。一。の。ぞ。り。ゆ。ざ。や。白。井。志。へ。ゆ。の。徵。され。ト。趣。舍。ま。ろ。く。丁。場。あ。ぐ。替

馬よ。約。逢。金。とも。暮。て。坂。ら。ぬ。よ。あ。居。つ。物。を。も。う。田。丈。の。茂。林。の。邊。巻。を。出  
む。い。き。る。そ。迎。ゆ。物。を。事。ん。苗。守。と。そ。と。ひ。ま。け。身。を。起。さ。と。ほ。程。す。單。節。ひ。そ。く。推。禁。て  
物。体。か。だ。り。宣。ふ。う。か。生。ま。だ。り。物。の。骨。を。羈。く。天。結。陰。る。夜。を。と。ち。く。親。を。使。さ。  
苗。守。や。せ。ん。物。の。今。迄。か。う。逢。が。な。ま。も。心。か。う。佑。れ。ど。迎。ふ。豈。か。ア。姑。き。ぬ。獨。寂。く  
慰。り。ゆ。く。ち。ん。ね。わ。ひ。を。倍。ん。欲。と。く。い。り。で。苦。一。紀。胷。よ。の。案。一。煩。ひ。ゆ。り。お。胷。  
尚。甲。夜。よ。ゆ。る。彼。茂。林。の。邊。あ。で。走。一。走。邁。く。迎。侍。ん。要。時。の。程。が。俟。せ。や。と  
懇。ま。慰。り。く。立。あ。く。坐。を。引。曲。く。か。ん。身。を。坐。一。遣。ら。ん。と。そ。壁。訴。を。や。へ。走。た。二。人。列  
さ。く。く。お。く。拉。ス。ア。来。る。顔。う。ら。お。だ。を。ゆ。ぐ。又。牠。名。ひ。を。倍。ん。の。ミ。彼。玄。妙。寺。の。鐘。の。声。今。撞  
ゆ。ま。う。初。更。ゆ。と。早。ま。く。歩。く。邁。違。ん。や。且。く。俟。バ。及。て。事。ん。今。朝。も。今。朝。と。  
か。ん。身。と。曳。ひ。げ。天。役。よ。立。を。争。ひ。く。の。か。え。れ。邁。ん。彼。ゆ。ん。と。く。女。子。ゆ。ふ。相。心。一  
か。ぬ。馬。追。ふ。ま。ぎ。も。老。る。ま。い。を。養。ふ。便。著。と。真。實。一。紀。心。操。ひ。づ。れ。を。妨。孰。を

妹とすたとけぬ。事妨ぐひを争ひひそかに方へ送されあひあたもの孝行を免  
ゆ。就ちやす就く悲一死の豊嶋煉馬の死滅ことより外面透しきる酸  
鼻うち声細やふ言可惜くわかれども受うて御恩ハ須弥より高む吾脩が主君  
陪臣でも世不知れう道策ある。あきいひをあひゆ。恥を告び情由立た  
る。おぞれ老の諭言と挾せうて次ちうて猶れども若うりそめ背被處へまうは  
し。比あぐ死す次脚内の若黨姥雪世四郎とひよ和郎よもひのを膺太くゆ人  
視の閑を幾遍欣踰く。夜の情の塊と有身一す縡叢覺く郎と共に縛め  
られ余を召ゆ。主君の側室阿是非とみ其比懷難をかひ。と惻隱む  
帰女子か。彼我が爲小ちう一寛ゆ。さうが併日ごろ經る隨よ産ゆ。一ハ男  
兒ゆ。道松と余けくる吾脩も亦く程かく藏舎の中よ産帶を解く。と無  
慙や。道松和子の誕生あり。を歎のあまうや。と喪え。死首を續れ。母子入  
懇よ庇を賜ひ。主の恩ひ。どう仇ふ送まへ。とそのと先ちひ決ゆ。と云ふ如く  
又もえうだ。只和子をひ。掌の玉と。愛く夜と日と。かく字育ある。セホ衣ね。だ  
寛正三年春。二月のと。や。主君の側室の三の町。ア。黑白と。ひ。腹。よ。で來。一。  
正月と。娘。あ。う。との母脚前の惡心起。まく正妻。のやされ。阿是非と。う。と  
世を去り。あ。う。和子も。一。死。一。死。を。箇様。々々の。う。や。う。和子ハ不思議。よ。客す。  
姓。生。せ。か。く。黑白。を。下。り。悪。入。ハ。死。う。か。く。死。れ。く。彼娘。ゑ。二。オ。ア。イ。を。大。塚。の  
莊官許親知ら。と。う。約束。を。養。す。取。う。あ。ひ。ふ。う。この。時。み。神。よ。禱。す。

科糾。も果。じ。免。され。く。世四郎。ぬ。ゆ。穏便。身の眼。を。あ。り。吾脩。ハ。乳房。ゆ。く  
張。れ。が。そ。も。う。呂。よ。苗。わ。れ。て。和子。の。乳。母。ふ。か。ま。れ。う。され。が。吾脩。が。産。う。い。仔。ハ。近。輩  
人。許。杜鵑。子。よ。遣。ら。て。七。才。の。春。来。字。一。ゆ。い。先。と。も。年。来。道。策。あ。ふ。お。子。育。ゆ。う  
一。ふ。道。松。和。子。の。誕。生。あ。い。を。歎。の。あ。ま。う。や。と。喪。え。死。首。を。續。れ。母。子。入  
懇。よ。庇。を。賜。ひ。主。の。恩。ひ。どう。仇。ふ。送。ま。へ。と。そ。の。と。先。ち。ひ。決。ゆ。と。云。ふ。如。く  
又。も。え。う。だ。只。和。子。を。ひ。掌。の。玉。と。愛。く。夜。と。日。と。か。く。字。育。あ。る。セ。ホ。衣。ね。だ  
寛。正。三。年。春。二。月。の。と。や。主。君。の。側。室。の。三。の。町。ア。黒。白。と。ひ。腹。よ。で。來。一。  
正。月。と。娘。あ。う。との。母。脚。前。の。惡。心。起。ま。く。正。妻。の。や。され。阿。非。是。と。う。と。  
世。を。去。り。あ。う。和。子。も。一。死。一。死。を。箇。様。々。の。う。や。う。和。子。ハ。不。思。議。よ。客。す。  
姓。生。せ。か。く。黑。白。を。下。り。悪。入。ハ。死。う。か。く。死。れ。く。彼。娘。ゑ。二。オ。ア。イ。を。大。塚。の  
莊。官。許。親。知。ら。と。う。約。束。を。養。す。取。う。あ。ひ。ふ。う。この。時。み。神。よ。禱。す。

佛を念して夜垢離執と貞女はる吾脩を持不憑く。齋一食て道策ある。次の年春七と在里不養せ。子共を召す。兄を十條力三郎弟を尺八郎と名づけ。十條ハ安の氏吾脩が親ハ十條佐吾とぞ御内の煉馬家。歩輕卒へけを加以。胞兄弟を道松和子の潤侍ふとく手習素讀武藝を。和子と答へて習へ。かの主君の允慈愛へ誓を取る。物もや。かく去歳の春の季豊嶋殿左衛門尉の歩輕卒。禿木市郎の兩箇の女兒を力二尺八丈娘ふとく猛よ縁説信盛を。歩輕卒の娘の東ド。左衛門尉の娘の西ド。和子と同姓。時一月。整方く娘の東ド。妻を妹の西ド。ハ尺八丈の婚姻も同姓。時一月。士官世子珍の妹夫。同庚。主の和子道松。道策ある。もとく妻を娶らせても道策ある。皆が指揮の隨かり。その欲びは總よ一宵明。修羅の哀。渠。渠ひき。俄頃の出陣。池袋の敗軍。豊嶋煉馬の死。一族貞を竭。と聲れ。和子と子共の存を。拝ゆ。後ゆ。ともかくもや。豫て覺期を究め。夕ハ誰も残らず。吾脩が主君道策ある。允為が多々の市郎ぬ。おで其處に

余を隕。又バ煉馬の館入火攻せられ。家中の男女大きさを灰燼と失せ。時存命。大くもあらぬ身の脛又を。すれバ兩箇の媳婦を左右。辛く重圍を脱。些の由縁をあう。この山里不落住り。ハ全く命を惜む。和子と子共の存を。拝ゆ。後ゆ。ともかくもや。豫て覺期を究め。夕ハ誰も残らず。吾脩が主君道策ある。允為が多々の市郎ぬ。おで其處に

その甲斐あり。次に和子へ信をえ。どがびつかたハ子共の二人のことを。音耗。和子へ。俱小戦。死。やあん妹夫の契り。魄。一宵。日も添ぬ。良人の面影。尚視覚る。追ふ。和子とそぞろ。変ぬ操の姉妹。山婦の。枝。熟。も。吾脩。優。忍。孝。娘節義を。も。就。ひ。ひ。舊夫世四郎。犬山の家を去り。神宮河原。不樂。も。稽平。と。名を改。網引を業。只。ぞ。細。煙。を。立。械。の。廟。ゆ。今。の。有。恙。あ。だ。と。畠。松。の。風。の。便。り。ふ。や。一。と。廿。年。よ。餘。る。去。歳。ま。も。絶。く。歸。参。ね。が。い。こ。お。て。あ。う。や。が。う。願。ひ。を。辛。度。況。や。主。家の。滅。亡。を。あ。く。を。良。と。阿。密。々。と。仇。人の。民。よ。か。果。心。鬼。狹。人。

一と人との事ひゆる縁ハ絶ても両箇の子共が親てふ文字前られぞ断じて断すぬ  
血脉を引く胞兄弟俱不父不似く余惜一弓を伏易。仇人不降參もとやが信を  
ありくよ。あまうあまととどもか序序心よかすうに竊よ和子よ向あうせどもこれへ知度を失た  
何事ももご告歎せ。子とくす、絶てかへ親のまろハソロ長閑さんをなまくされ  
うめを先き。愚痴ハ老女の癖ゆを噫益もかく長物語よ夜延の隙を費して耳苦  
くも笑れど。とくら鼻をうちかぶ單節も涙さー咤。とく有うれし物語ハ皆  
教訓の端あふ一言かども苟且ようけあくア待てんや婚姻の霄の促く別れ良今  
とく世不在りと一か決め孫二世の契よを憑ひ。と胞兄弟俱不似く仇人不降參  
あみだ。とく有おだよ。胸苦したは世四郎。あみ噂笑ふ阿翁ともいれぬ義理の  
柵あか序歎祀を外すのを過一か六故そあら妹伏の縁ハ絶ゆども両箇の子達安  
御前共侶二十年あまう天山の家仕へてまぜず。帰参の願ひの空をぎり一へされ  
れ

故不を停け。浮世の中不親。とく子をうなぬへたるものと執成せ。頭をうち掉りをか  
らむ。とく當國も亦扇谷家の米地を守れども神宮の郷ハ豊嶋の舊領也。百姓ハ  
されかくまれ。被人ハかく阿容々々と仇人の民かれんや命を厭ひを推せば故主の恩も  
ことく。子共のゆも。らひゆいも忘れかん。と腹立しげぶり滅ぼす。外画小立入響音を音音ハ  
あく笑つて。彼ハ曳ひが還り。形ん疾燈燭をとく間ふ單節ハ腕く柄指燭して。  
え。とく。先ふ立つ。折戸の裡画す。奴あるかくせあひ。欽。やどらやかく。遅かり。とくひうけと  
振照ら。指燭よ面を對せられ。それ失あ。とくもあぬ老ち一個の行客。袱包を  
肩中く竹子笠を引提つ。戸口ふ立て小腰を折り。某ハこの山脚ある田縁を尋ねのふかん。  
途先。城下追れ。と息煩れて堪が。水一瓢賜れ。とそれで急地奥覓貌ふ。舟  
づくとも視戍る。音音へひまざあび。とく曳ひよ。とくそ疲勞。とく馬を牽  
い。とく足を濯ぎ。休ひ。とく慰も立て。單節が東も。指燭の光よ。とく

亦行客と面を對いて鈍矢や錯ひ抜けと不樂しげ不速よ再び見んかうとする行客  
あく呼子くとをへ音音かくざぬ。されハ世四郎の稽平か見忘れる次つわどと。  
名告る小松どうも騒ぐ冒合ぐ死諸折戸を裏回す。破と引薙う軍節へ件の老人が  
名告うと愛くの人にありたからひあらば胸苦しあふとが良退く姑の袂を窩み抜駆く  
老ぬ行客を強顔くらく適一もせ若彼へすく良人の姿を映しとあひて。  
心入もと今宵はあふ歇あると武藏のゆきの今昔を語慰めゆひどとつむ  
果た声苛やるふと何等をつゆまやん心弱ひと女子とのとも浮世の義理の背がえ  
善やててもゑりせ年あまし縁絶る。舊夫ハ兩箇の子共が親ゆく親かくべ金をと故  
き名告も會べむ。此不軌み異からんや世四郎とく縁斷くう又稽平とく翁不諳  
覺絶くか。譬へ認ぬ行客をとも故主の鴻恩忘ゆとあく忠義は厚き誠あべ  
今宵は疎りくとも畠るよりあぐれ年あまし一日も帰参の勧解とおうともせど。



仇人の民とあるまでお美理よ背卓人と知りて何樂くと武藏の久の今昔をもへ  
相譚べたるも捨て指孤う情をも被ひと敦園卓哉老女の一轍をモ理ともあ  
み。至よ<sup>ヒテ</sup>單節ハよ<sup>ヒテ</sup>曾苦<sup>シ</sup>と背向かひて嘆息を惜平これを遺<sup>ル</sup>音意恨  
きをあふ。され豈夫婦の情義をも。阿客々<sup>シテ</sup>かん身を訪<sup>ス</sup>忘れ、交を故  
をもあ。金<sup>ス</sup>。ひゆ、主の恩<sup>下</sup>日も仇かひども浮世の塵<sup>リ</sup>避<sup>フ</sup>す。漁夫とあり果<sup>ス</sup>又一介の功もか。向面  
目<sup>ス</sup>帰参の勧解して子共の身の幅<sup>リ</sup>を険<sup>カ</sup>くせ。これが毫素<sup>ス</sup>ものうう志<sup>シ</sup>ある。す  
胸心<sup>ス</sup>もかひ<sup>ル</sup>。令郎君のうへ<sup>ス</sup>。且又子共のす<sup>ニ</sup>も竊<sup>ス</sup>報をもひ。武藏の盡<sup>ス</sup>  
ことも<sup>ス</sup>。恥がやう<sup>シ</sup>く詣來<sup>ス</sup>。且くあ<sup>ク</sup>を開<sup>タマ</sup>ヒ<sup>シ</sup>敵<sup>シ</sup>折<sup>ル</sup>戸の内<sup>ス</sup>。音<sup>ス</sup>音<sup>ス</sup>  
す。身のう金<sup>リ</sup>も竊<sup>ス</sup>報<sup>ス</sup>といふ。再び曾<sup>シ</sup>ば<sup>リ</sup>をひ<sup>ス</sup>て回參<sup>ス</sup>。心立<sup>ク</sup>思<sup>キ</sup>え  
そく。まよ<sup>カ</sup>かう<sup>シ</sup>り<sup>ム</sup>。いま<sup>よ</sup>ひとひの思<sup>キ</sup>え<sup>シ</sup>。あく<sup>シ</sup>い。高<sup>シ</sup>い。とことね  
そく<sup>ス</sup>。叔也<sup>シ</sup>單節<sup>シ</sup>。漠<sup>タマ</sup>さ<sup>ム</sup>。今の世の人心親同胞<sup>ス</sup>。も地<sup>レ</sup>の<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>人<sup>ス</sup>  
敵<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>間<sup>シ</sup>謀<sup>者</sup>もあんじん。翌<sup>ス</sup>閉<sup>ル</sup>鎖<sup>シ</sup>心<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>の戸外<sup>カ</sup>れかひ<sup>ム</sup>。蓋<sup>シ</sup>をうむ。

よ。うとゆうええ。せう。ちと<sup>シ</sup>。かりや<sup>シ</sup>。ぞい。  
咲<sup>カ</sup>く履<sup>ス</sup>音暴く縁頬<sup>カ</sup>る障子<sup>シ</sup>を破<sup>ル</sup>と齋隔<sup>ス</sup>母屋<sup>シ</sup>退<sup>ス</sup>入<sup>リ</sup>單節<sup>ハ</sup>を<sup>カ</sup>く<sup>シ</sup>を目<sup>ス</sup>  
送<sup>ス</sup>。さく<sup>シ</sup>も氣剛<sup>シ</sup>姑<sup>シ</sup>の心<sup>底</sup>を汲<sup>ム</sup>ね<sup>ス</sup>。とあ<sup>ハ</sup>良<sup>人</sup>の安否<sup>シ</sup>を問<sup>フ</sup>おほ<sup>シ</sup>ま<sup>す</sup>母屋<sup>の</sup>  
を<sup>こ</sup>き<sup>ス</sup>。さく<sup>シ</sup>も遠<sup>シ</sup>く指燭<sup>シ</sup>拂<sup>フ</sup>と振<sup>シ</sup>滅<sup>ス</sup>て竊<sup>シ</sup>小折<sup>シ</sup>引<sup>シ</sup>開<sup>タマ</sup>て惜平<sup>シ</sup>透<sup>ス</sup>。そ<sup>シ</sup>痛<sup>ス</sup>  
暗<sup>シ</sup>夜<sup>シ</sup>何時<sup>シ</sup>立<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>。阿姑<sup>シ</sup>御<sup>シ</sup>母<sup>シ</sup>の礼<sup>シ</sup>言<sup>フ</sup>年来大人のを<sup>も</sup>思<sup>フ</sup>食<sup>フ</sup>誠心<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>  
を<sup>あ</sup>。ま<sup>す</sup>。山<sup>シ</sup>辺<sup>シ</sup>交<sup>ス</sup>客<sup>シ</sup>店<sup>シ</sup>。且く彼處<sup>シ</sup>の柴<sup>シ</sup>置<sup>ス</sup>小<sup>シ</sup>屋<sup>シ</sup>。途<sup>シ</sup>の疲<sup>シ</sup>労<sup>シ</sup>を休<sup>フ</sup>り<sup>ス</sup>。  
あ<sup>ら</sup>が<sup>シ</sup>を<sup>ま</sup>候<sup>ス</sup>。母<sup>屋</sup>へ<sup>伴</sup>ひ<sup>あ</sup>る<sup>シ</sup>。よく<sup>シ</sup>單節<sup>ト</sup>あれ<sup>ス</sup>。娘<sup>シ</sup>に<sup>ゆ</sup>う<sup>ス</sup>と名<sup>告</sup>あ<sup>フ</sup>。そ<sup>の</sup>う<sup>ス</sup>  
裏<sup>シ</sup>を<sup>ぞ</sup>か<sup>シ</sup>。ゆき。おと<sup>シ</sup>。もと<sup>シ</sup>。ひのき。のき<sup>シ</sup>のあつ<sup>シ</sup>。ひよ<sup>シ</sup>。ひづ<sup>シ</sup>  
袖<sup>シ</sup>を<sup>ゆ</sup>く。押<sup>シ</sup>す。惜<sup>シ</sup>。平<sup>シ</sup>す。被<sup>シ</sup>びて。原来<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ハ豫<sup>シ</sup>て<sup>シ</sup>く。尺<sup>ハ</sup>妻<sup>シ</sup>單節<sup>シ</sup>。か<sup>ク</sup>一<sup>度</sup>。  
か<sup>く</sup>年<sup>シ</sup>來<sup>ス</sup>の志<sup>シ</sup>と情<sup>シ</sup>由<sup>シ</sup>を音<sup>シ</sup>音<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>。かれ<sup>リ</sup>罵<sup>シ</sup>り<sup>ス</sup>とも厭<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>。廿<sup>年</sup>あ<sup>リ</sup>胡<sup>シ</sup>越<sup>シ</sup>  
絶<sup>シ</sup>。冬<sup>シ</sup>故<sup>シ</sup>王<sup>シ</sup>竭<sup>シ</sup>忠<sup>シ</sup>義<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>え<sup>シ</sup>鳴<sup>シ</sup>呼<sup>シ</sup>。も<sup>シ</sup>竊<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>令郎君<sup>シ</sup>見<sup>シ</sup>參<sup>ス</sup>。稟<sup>シ</sup>試<sup>シ</sup>。そ<sup>の</sup>う<sup>ス</sup>  
一<sup>議</sup>あり。ま<sup>す</sup>。又<sup>シ</sup>子<sup>シ</sup>共<sup>シ</sup>。母<sup>屋</sup>と娘<sup>シ</sup>を告<sup>シ</sup>。も<sup>し</sup>事<sup>と</sup>ある<sup>シ</sup>。舟<sup>シ</sup>を空<sup>シ</sup>。還<sup>フ</sup>本<sup>シ</sup>意<sup>シ</sup>  
あ<sup>リ</sup>。ゆ<sup>く</sup>。臥<sup>シ</sup>房<sup>シ</sup>。や<sup>ハ</sup>何<sup>シ</sup>あれ。宿<sup>シ</sup>。曉<sup>シ</sup>。か<sup>シ</sup>ひ。ひ。つ<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>单<sup>シ</sup>節<sup>ハ</sup>又<sup>シ</sup>も位<sup>シ</sup>。世<sup>ト</sup>そ時<sup>シ</sup>

物休か。良人の爹々宿便あへを甲斐からまづ言の葉を縁ふ葉る誠とが  
こうも詭かひん心苦へと限りあれど彼处不要時潛せぬ。大々々土間あれど蓑毛  
些ハ情か。物欲うへざなびて蚊遣の圓角進くせん。行累の重げ不又は傍に  
うへ不預けぬ。とあふ陽あた愛々しま。猪平ちもく心もあく田文の茂林モ二箇の  
包を揃違へとよきひゆうけれどあくべこれをと肩よりあらを。單節ハ左右不交携て  
免へら。先立て柴小屋。案内をとて休息す。二更の鐘の音ある。當下音音の障子を  
起きて單節ハ何處ぞ寝もの鐘の報ふ曳ぬハモクス。と向れて單節ハ  
柴小屋より兩三束の續松をとて添く走り出まのむ立ち苦ら。蒙る月來熟る  
路をまよひ。遠くそぞれと回蒼。母屋一衝と入て猪平が西箇の包をとて假戸棚  
隠し。草鞋穿締め裙壺おてのまく移せ松の火をゆり照して外面を頻る走りる。

里見八犬傳第五輯卷之四終

水編へ、またし内に  
猪平院

